



第95回 ひとの話をきくということ

▼話のきけない人

私は人の話をきくのが苦手である。医師をしていながら、それはおかしいんじゃないかといわれそう。病気の診断や治療をすすめていくときに、患者さんの話を聞いておかないと、さまざまなトラブルがおこる。患者さんは、こちらが想像する以上に、語られた言葉や表情などを読み取って思い悩んでしまうものらしい。「良性のポリープで問題ありません、大丈夫ですよ」と伝えても、「ポリープって癌なの?」「本当に大丈夫なのか」など、いろいろな不安が浮かんでくる。忙しそうに医師の姿を見ると、患者からはよけいに聞けなくなってしまう。

▼話のきける人

仕事から離れて、プライベートで話をするとき、何となく話しやすい人というのがいる。その人を観察していると、あまり自分からはしゃべらない、話をさえぎらない、こちらの話をちゃんと聞いてくれる雰囲気(目線、うなずき、微笑み)が漂っている。自分はどうかと振り返ってみると、相手の話をきくときは、何が問題なのか、どう対処すればよいのか、をつねに考えてしまう。井戸端会議のように、話題があちこちにとんで、つかみどころのない話には、だんだんイライラしてくる。聞き上手な人は、しゃべるのを促すように楽しむように自然にそこに居る、そんなことがどうしてできるんだろう。『「聴く」ことの本質』(鷲田清一)に、“ケアとはその相手に「時間をあげる」こと”、という一節があったのを思い出した。たしかに、聴くことは自分の時間を相手にあげること、かもしれない。

▼話のやりとりを楽しむ人

聞き上手な人に尋ねてみると、「話の内容にそんなに興味があるわけじゃない」「でも、どうすれば相手が嬉しいのか」がわかるらしい。相手の感情に焦点を当ててい

るのだ。まるで、話題に波乗りしながら、たゆたゆと海に浮かんでいるようなイメージである。私の場合、興味のない話題だとすぐに別のことを考えてしまう。結局、話をきくという行為は、相手への共感や思いやりということに尽きるのだろうか。聞き上手というのは、人間そのものに関心の深い人なのだと思う。自慢する、卑下する、愚痴をいう、怒る、よろこぶ、そういう姿に人間らしさを感じ、おもわず聞き入ってしまう人が「聴き」上手だ。人間への限りない興味が、その底流にはあるらしい。じつは、きくのが苦手な私も、相手の人間性、とくに標準からずれている部分につよく魅かれるようになった。なんだかこの人変わってる、面白いぞと感じると、思わず聞き入ってしまう。それは相手にも伝わるものらしい。自分を解きほぐして肩の力をぬく、その手がかりになりそうな予感がする。私のひそかな夢は、井戸端会議でたわいもない話をして笑っている自分、そういうものに私はなりたいたい。



鳥取大学医学部
地域医療学講座
教授

谷口 晋一
(たにぐち しんいち)